

# 無自覚と無知

## 宮部 峻

MIYABE Takashi

**大**学院生のころに入っていたプログラムの関係で、さまざまな地域活動の現場に連れて行ってもらった。目的は、地域活動の活性化と、住民の支え合いを促すヒントを得ることだった。研究者の多くは、まずは頭(理論)で考える。しかし、頭で描いた通りに現場の実践がうまくいくわけではない。だから、現場の実践に研究者も加わって観察して学ぶ。そういった趣旨であった。

訪れた地域の多くでは活動が停滞していた。プログラムではワークショップを開催して住民参加を促そうとしていたが、うまくは行っていなかった。もともと地域の社会関係が希薄で、活動に参加して盛り上げようというモチベーションが高まらないのだ。こうしたことは現場に触れずとも、想像がつく気がした。

そんなとき、地域活動が盛んだという、とある地域を訪れる機会を得た。ほかの地域から移住を希望する高齢者も積極的に受け入れている地域だ。実際にワークショップの手伝いしてみると、ほかの地域と比べても多くの住民が参加していた。議論も活発で、将来に向けてこの地域をどう良くしていくか、意見が次々と出てくる。聞いたところでは、長いこと住んでいる住民も多いが、ほかの地域から来た人にも寛容で、住民同士の支え合いもあるという。なるほど、やはり地域の社会関係が豊かだと違うものだと納得した。

頭で知っていたことが証明されたと思い、東京へ帰ろうと駅へ向かって歩き出したと

き、大雪に見舞われた。心優しい住民の方が駅まで車で送ってくれると言うので、ありがたく乗せてもらった。

車中、地域の実情について話してくれた。曰く、この地域には、歴史的に差別されてきた人たちがいる。その人たちは行政に対する不信もあって、支援が必要でも行政の窓口に向かうこともなく、ましてやほかの住民を信頼してもいない。でも、本当に支援が必要なのはそういった人たちだと。

この話を聞いて、「住民」という言葉で捉えきれしていない人びとの存在に気づかされた。そうした人びとの存在にまったく気がついていなかったし、考えようともしていなかった。無知だけでなく、無自覚でもあった。

歴史的に根深い問題なだけに、解決は容易ではない。しかし、その問題に気づかされて以来、私は厳しい現実をなんとか理解しようとしているようである。

哲学者のチャールズ・テイラーとヒューバート・ドレイファスは、『実在論を立て直す』(法政大学出版局、2016年)という本の中で、「接触説」という見方を提唱した。ここでは思い切って要点だけ述べると、元々、別の地平にあるように思えた存在に接触することで、やがて共通の地平にたどり着くことがあるということだ。「自己理解が変わらなければ、他者の理解もない」(同書205頁)のである。

別世界のものだと思っていた存在を認識したからといって、すぐに理解できるわけではないだろう。しかし、触れることによって、やがて共通の地平に、共通の世界にいることに気づくはずだ。人と人とを隔てている多くの境界に、私たちは無自覚であり無知でもある。だからこそ、頭で考えるだけでなく、触れるという経験が重要になるのだろう。

(みやべ たかし・親鸞仏教センター研究員) 近年の論文に、「信仰と組織をめぐる矛盾と運動——戦後の封建遺制論と真宗大谷派の改革運動に注目して」(『年報社会学論集』第34号、2021年)、「戦後日本社会における「大衆」と「宗教」——高木宏夫の宗教研究の理論的再評価を通じて」(『現代社会学理論研究』第15号、2021年)など。